

## 要旨

英語以外の言語の学習にも関心が向けられる中、英語以外の言語における語彙量のレベルを測定するテストの開発は英語のものほど進んでいない。日本語を例にとると、インターネット上には日本語の語彙量を測定することを目的としたテストが見られるものの、学術的な根拠に基づいているかどうかは定かではなかった。また、テストを開発および日本語母語話者の語彙量の測定を試みた学術論文は私が知る限りでは2本のみしか見つけられなかった。さらに、その研究の中にも課題が見つかった。まず、日本語の語彙量を測定する際には選択肢式のテストが適していないことである。理由として挙げられることはまず、選択肢式のテストは通常4択であり、勘での解答が可能であることである。そして漢字によって意味の推測が可能となり、他の選択肢が明らかに間違いであることを解答者が理解してしまうことである。別の問題として挙げられるのが、コーパスの中に同じ頻度で使われている単語が存在していることである。そのような単語は五十音順に並べられており、単語の難易度を正確に反映されているとは言えない。さらに、例に挙げた先行研究においては専門用語がほとんどであるという理由から最も頻度の高い5万語までを出題の範囲としているが、コーパスの中ではそれ以外の単語の中にもテストに出題する単語として適しているものが含まれている。つまり、日本語の語彙量測定テストにおいては出題の範囲を先行研究よりも広げる必要があると考えられた。挙げられた課題を解決して日本語の語彙量測定テスト開発に貢献するため、本研究ではイエス・ノー形式のテストを作成し、110名の参加者に対してパソコンを用いて実施した。コーパスの中で最も頻度の高い単語から最も頻度が低い単語までを範囲として、合計で13,728語をテストした。これらの単語は8つのテストに分けられ、それぞれが約1,800の日本語の単語を含むことになる。また不正解となる問題として、861の架空の単語を作成した。それぞれの参加者はパソコンを用いて合計2,461の単語に対し、その単語を「知っている」または「知らない」で回答した。頻度の他に単語の難易度を判定する材料として、それぞれの単語の普及率、および回答に要した時間のデータも収集した。テストの結果、本研究では平均の語彙量が149,182語(コーパス全体の単語数179,521に平均得点の83.1%をかけて算出している)と大きくなり有効でないとしている。しかし、これは語彙量測定において対処すべき点はまだコーパスに存在するためだと考えられる。これに対して、イエ

イエス・ノー形式のテストは先行研究で採用された選択肢式テストとは異なり、天井効果がなかったことから日本語の語彙測定に適していると判断した(標準偏差 7.942 の二倍の数値を平均得点に足しても満点の 100 を越えないため)。また普及率と回答に要した時間のデータを用いて、母語話者の日本語使用実態を踏まえて単語を難易度順に並び変えることができた。まず、同じ頻度の単語に対しては普及率が高いほうを容易だとした。そして同じ頻度、普及率の単語に対しては回答に要する時間が短いものを容易だとした。また、普及率の測定は語彙量測定テストに出題すべきでない単語を見出す基準ともなりうることが分かった。頻度が高いにもかかわらず普及率が低い単語は間違ったフリガナを与えられていたり、普段ひらがなで使われているにもかかわらず漢字で登録されていたりしており、特に不適切な場合が多かった。また、文章の中で出題されることが好ましい単語もあり、単語のみを単独で出題するイエス・ノー形式では用いられるべきではないものの発見に役立つと言える。また、不正解となる問題の質についてもイエス・ノー形式のテストにおいて分析が可能となった。それぞれの架空の単語に対して「知っている」と回答(つまり不正解)した参加者の割合から、漢字を用いた架空の単語のほうがひらがなやカナカナのみの架空の単語に比べて有効であることが分かった。ひらがなやカタカナの架空はほとんどの参加者が「知らない」(正解)の回答をしており、回答者の注意を促すには役立ちにくいことが分かった。また、漢字の架空の単語を見ると参加者は出題される単語全体により注意を払うようになり、回答の信用性が増すと言える。本研究から得られた結論の一つは、天井効果が見られないことから、イエス・ノー形式のテストは日本語の語彙測定テストの形式として適していることである。さらに、日本語の語彙測定テストのより高度な開発にあたっては、普及率や回答に要する時間の収集をより効果的に行えるイエス・ノー形式のテストは有効な手段だと言える。本研究で得られた普及率や回答に要する時間のデータを用いてテストで出題した単語すべてを五十音順より根拠のある方法で難易度順に並び変えることができた。その中から本研究で「不適」とされる単語を除いたり、回答者に注意を促す不正解となる問題の質を上げたりすることで、日本語の語彙量測定テストのさらなる開発に貢献できるだろう。

キーワード: 日本語語彙量測定テスト、コーパス、頻度、イエス・ノー形式、普及率